ロシア史料より見たグシ汗の事績

若松　寛

【要約】 オイラトのグシ汗 Güši xān（顧実汗）が一六三六年青海湖畔へ遠征して、翌三七年ソォクトゥーホンタイジの軍を撃滅したのを皮切りに、チベット全土を平定して、一六四二年チベット王の座に昇った経緯はよく知られているが、それより以前、即ち故郷のジュンガリアに居た時期のグシ汗の行状はほとんど知られていない。本稿はこれをロシアの古文書に拠って明らかにしようとしたものである。ロシア古文書によれば、グシ汗はタルバガタイ山麓に本拠を置いたが、一六三〇年敵を追ってエンバ川上流のカラクム Xara Xum に姿を見せた他、一六三四年にカザーフ遠征に参加した等の事実が知られる。ソォクトゥーホンタイジ撃滅戦の記録もロシア古文書に残されている。その他、グシ汗の兄バイバガスに関してもロシア古文書に若干の記録があり、それらによれば、バイバガスは一六二〇年代末頃殺害され、その未亡人グンジーハトゥン Günji xatun はグシ汗と再婚したと考えられる。故バイバガスのオイラト汗位を継いだグシ汗がチベットへ移住した後も、グンジーハトゥンは故地に留まって、夫の留守を守りつつオイラト人の信望を集めたこともロシア古文書から窺い知ることができる。

史林　五九巻六号　一九七六年十一月

はじめに

清の康熙・乾隆朝にイリ盆地に拠って東西トルキスタンにも威を振るった西モンゴル族オイラトのジュンガル Zōn γar（準噶爾）汗国は、北アジア最後の遊牧帝国として注目されているが、その歴史は未だ十分に解明されていないようである。特に、有名なガルダン Galdan（噶勒丹、噶爾丹）が汗と称して（一六七九、康熙一八年）、ジュンガル汗国が名実共に成ったそれ以前の歴史についてその感が深い。筆者はかつてジュンガル汗国勃興の祖カラクラ Xara xula（哈喇忽喇。一六三四

年没）の生涯[1]を考究して以来、汗国の前史に関心を抱いてきたが、生来の無能と怠惰の故に、わずかにガルダンの前代の汗国支配者センゲ Sengge（僧額、僧格）の治世期（一六五三―一六七〇年）の内乱[2]について考え、次いで、汗国の建設者バートゥル－ホンタイジ Bātur xong tayiji（巴図爾渾台吉。センゲの父、カラクラの子）の治績（在位一六三五―一六五三年）を概観[3]したにとどまった。この間、羽田明氏が積年の厄魯特研究を集大成して、ジュンガル勃興の側面を解明され[4]、多大の啓発を受けた。こうした状況の内で筆者の関心を終始強くとらえて離さなかったのは、バートゥル－ホンタイジの治世期に当り、一六三六年に青海方面へ進出し、ついにはチベット王の座に登った（一六四二年）グシ汗 Gūši xān（顧実汗）の存在であった。

この時期のグシ汗については、チベット史料から考究された山口瑞鳳氏の労作[5]があり、これによってほぼ解明しつくされた感があるが、青海進出以前のグシ汗については、さすがのチベット史料も沈黙を守っている様子であり、事情は中国史料とても同様である。従ってそれまでのグシ汗の姿は謎に包まれているとすらいって差支えない。本稿は一七世紀のロシア古文書に依拠して、その謎を幾分なりとも解いてみようとするものである。

この場合の一七世紀ロシアの古文書 архивные документы とは、左記のロシア・モンゴル関係史料集に収録されたものをいう。

Русско-монгольские отношения, 1607–1636. Сборник документов. Сост. Л. М. Гатауллина, М. И. Гольман, Г. И. Слесарчук. Отв. ред. И. Я. Златкин, Н. В. Устюгов. М., 1959.（以下、РМО, т. 1 と略称）

Русско-монгольские отношения, 1636–1654. Сборник документов. Сост. М. И. Гольман, Г. И. Слесарчук. Отв. ред. И. Я. Златкин, Н. В. Устюгов. М., 1974.（以下、РМО, т. 2 と略称）

右の第一巻は拙稿「カラクラの生涯」の基本史料として利用したことがある。その折、その収録文書にクイシャ－タイシャ Кýйша（Гýйша, Гýмша, Гýшей, Кýкш, Кýшей）-тайша（тайша はモンゴル語 tayiji〔台吉〕）なる者の動静を伝えたも

のがあり、編者スレサルチュク氏らはこれを巻末の人名索引では、カルムクのタイシャと注記するにすぎず、具体的に素性を示さなかったが、筆者はこれがホショート Xoŝōd（和碩特）部のグシ汗かと疑ったのであった。しかし当時の筆者の関心はジュンガル部長カラクラその人にあったので、それほど深く追求するに至らないまま、ほどなくしてロシア古文書を駆使したズラートキン著『ジュンガル汗国史』（И. Я. Златкин, История Джунгарского ханства. 1635-1758., М., 1964. 以下、ИДжХ と略称）が現われて、それを読むと、クイシャ－タイシャはカラクラの子と明記されており（Там же, стр. 150）、いささか冷水を浴びせられたおもいがあった。このため真相解明を史上のグシ汗の最も華々しい活動時期の文書を収録する予定の史料集続巻に期したのであった。

期待された続巻はようやく一九七五年になって筆者の手にする所となったが、ここにおいて、クイシャ－タイシャが同じ編者スレサルチュク氏らによって、グシ汗その人と断定されていることを知った。筆者も同書を詳細に検討した結果、その断定はゆるぎないものと確信するに至った。それと同時に、ズラートキン氏の誤解が何に由来したかも推測するを得た。[6]

クイシャ－タイシャがグシ汗であることはさしあたり次の証例を挙げるだけで得心がいくであろう。

一六三〇年十二月六日付[7]のウファー Уфа 知事による使節庁 Посольский приказ 宛報告に（РМО, т. 1, док. No. 81）、この年八月二日以前にウファー市に到着した、「カルマク[8]のウルスのバイバギシュの弟クイシャ－タイシャから из колмацких улусов от Байбагишева брата от Куйши-тайши」（л. 79）のカルムク人使者に対する当市での待遇について述べられているが、ここに見えるクイシャ－タイシャの兄に当るバイバギシュが、グシ汗の兄バイバガス Bayibagas（拝巴噶斯）に違いあるまい。[8]

一六四二年十月十二日付のチュメニ Тюмень 知事によるトボリスク士族レミョゾフ M. Ремезов 宛通牒（РМО, т. 2, док. No. 59）に、この年十月八日にカルムクからチュメニに帰ったチュメニ勤務のブハーラ人の供述として、「クルデウ

レンに対し、ムガールから彼の弟クシィ Кушдевдену из Мугал бдат его Кушиий」(л. 51 об) が使者を派遣して来た、との一節が見えている。ここにいうクルデウレンが、グシ汗の次兄に当るクンドロン＝ウバシ Kündölöng ubaši（昆都崙烏巴什）であることは毫末の疑いもない。⑨ この一節は、当時ムガール即ち青海モンゴル地方に居たグシ汗が、タルバガタイ方面に住牧するクンドロンに使者を派遣したことをいうのである。

以下、ロシア古文書に拠って、年代を追ってグシ汗の動静を追求していってみよう。

① 「カラクラの生涯」（『東洋史研究』二二巻四号、京都、一九六四年）
② 「センゲ支配期のジュンガル汗国の内乱」（『遊牧社会史探究』第四二冊、東京、一九七〇年）
③ 「オイラート族の発展」（『岩波講座世界歴史』一三、東京、一九七一年）
④ 「再び厄魯特について―ジュンガル王国勃興史の一側面―」（『史林』五四巻四号、京都、一九七一年）
⑤ 「顧実汗のチベット支配に至る経緯」（『岩井博士古稀記念典籍論集』所収、東京、一九六三年）

⑥ PMO, т. 1 の人名索引に、Kyiuna-taiuna の転化形として前掲の如き例の他に、Kyja-taiuna なる例も混入しているが、この形で示される人物はクイシャとは無関係の別人である。Kyja については、PMO, т. 2, док. No. 94（九四号文書は、一六四七年七月一八日―八月三一日の間に作成されたと推定されるトムスク知事によるシベリア庁宛報告である）に、「コンタイシャの弟クラ Контайшин бдат Kyja」(л. 190) との一句があり（同文書 л. 195 にも、「クラはコンタイシャの弟 Kyja Контайше бдат」と見ゆ）、これを以てすれば、クラその人は、コンタイシャ（＝バートゥル－ホンタイジ）と共に、カラクラの子となるが、ズラートキン氏にあっては、クラとクイシャを同一人物視した索引の誤りを踏襲したため、クラをクイシャに言い換えて、クイシャがカラクラの子という結論に至ったものとおもう。

なお、PMO, т. 2 の人名索引においては、右の誤りは是正され、クラとクイシャは別項に分類されている。因に、PMO, т. 1 の人名索引には分類上の不正確さが往々見られるので、その利用には細心の注意を要する。これに反し、PMO, т. 2 の方は、信頼の置ける出来栄えであり、両書刊行を隔てる一五年間の学問的蓄積が窺われる。

⑦ 日時はロシア暦に従っている。これによれば、グレゴリー暦より後れること一七世紀においては十日である。

⑧ バイバガスの系譜を、西域同文志巻十（天山北路準噶爾部人名四、和碩特衛拉特属）に拠って示せば、左の如くである。

Xanai noyon xongyor（哈萊諾顏烘郭爾）
- Bayibayas（拜巴噶斯）
- Kündölöng ubaši（昆都崙烏巴什）
- Güši xan törö bayixu（顧実汗図魯拜呼）
- Zasaq toin（扎薩克托音）
- Buyan odxon（布顏鄂特藏）

⑨ См. PMO, т. 2, именной указатель (стр. 442)

一

グシ汗がロシア古文書に最初に姿を見せるのは、一六三〇年五月に使節庁(在モスクワ)で作成されたノガイ－タタール人らの供述調書においてである(РМО, т. 1, док. No. 77)。これによれば、

タライ－タイシャ Таиай-тайша とグムシャ Гумша のカルムク人は、エンバ Енба〔川〕からユルゲンチ Юргенч の方向へ一月行程のカラクム Каракум に遊牧している。(л. 43～44)

と記されている。タライ－タイシャとは、ドルベート Dörböd (都爾伯特)族長ダライ－タイシ Dalai tayiši (達賴台什)をいうが、これとグムシャ即ちグシ汗とが遊牧するカラクムが、そこにいわれるような位置にあったのかというと、実はそうではない。このカラクムは、別にロシア語に意訳してチェルヌィエ＝ペスキ Черные Пески (黒い砂)とも呼ばれるが、カスピ海北東岸から流れ出るエンバ Эмба 川の上流右岸域に位置するものである(См. РМО, т. 1, Географический указатель〔стр. 344〕)。従ってアム川下流のウルゲンチ市の方向にエンバ川から一月行程も離れているというのは誇張ないしは不正確になろう(См. Атлас СССР, М., 1955, 47–48, В-3, 4)。

タライ－タイシャとグシ汗が当時この地方に遊牧していたことは誤りのないことで、これには別に確実な記録がある。即ち一六三〇年にタライ－タイシャから派遣されてモスクワへ来た使者の供述によれば(РМО, т. 1, док. No. 78)、

彼らのタライ－タイシャはエンバ〔川〕の上流の広い河沿いの土地チェルヌィエ＝ペスキ――ウルゲンチの近く――に、自分の子供達と遊牧している。(小略) タライ－タイシャと共に、近くに彼の姻戚者 сват (血縁なく結婚によって生じた親戚関係の義――筆者注) なるカルムクのドルゲチ－タイシャ Доргеч-тайша とその弟 брат グシ－タイシャ Гуши-тайша が遊牧している。(л. 24–25)

とある。なお、ここに見えるグシ－タイシャ即ちグシ汗の兄に当るドルゲチ－タイシャとは、クンドロン＝ウバシの謂に

相違ないとおもう。なぜなら、この人は、『パクサムジョンサン Dpag bsam ljon bzaṅ』によれば、Thu miji uḥi jiṅ khun ti liṅ dur ge chi[1]、オイラト史料『ドルボン－オイロト史 Dörbön oyirodiyin tōke』（一七三七年医師 emči ガワン＝シェラブ Gabang šes rab 撰）によれば、Tümüdē kündölöng dörügeči ubaši[2]、欽定外藩蒙古回部王公表伝巻八十、青海厄魯特部総伝によれば、都爾格斉諾顔と号したことが知られているからである。

右の如く、デルベートのダライ、ホショートのクンドロン、グシらが当時カラクムに居たのも、オイラトの内乱が原因であったとおもわれる。この内乱については、すでに拙稿「カラクラの生涯」で取上げたことがあるので、詳しくはそれにゆずるが、要するに、ジュンガル部長カラクラの子のチン－タイシャ Чин-тайша の遺産をめぐって、一六二五年よりその兄弟のチョクル Чокур（＜Čōkür 楚庫爾）、バイバギシュ Байбагиш 両タイシャの間に紛争が起り、これを発端として、オイラト族全体が巻きこまれる内乱に発展したものであった。バイバギシュを支持して反チョクル派連合を構成したのが、前記のダライ－タイシ、ヴォルガ川流域に住牧するトルグート部長ホ＝ウルリュクらであり、一方のチョクル支持派には、ハンデリ－タイシャ、トルグートのメルゲン＝テメネらがあった。内乱は長期化し、一六三〇年当時、チョクル支持派が優勢であったが、なお前途の予断はつけ難い状況にあった。

ダライ、グシらがカラクム方面へ現われたのも、こうした状況の内で、この方面にいたとおもわれるチョクル連合軍を追撃して来たためであったのである。

チョクル Чекур、メルゲン＝テメネ Мерген-Теменей、ハンデリ Хандерь に向かってヤイク Яик〔川〕（＝ウラル川）の方へ、タライとグシ Гушей のカルマクの大兵―その数一万以上―が来て、チョクル、メルゲン＝テメネ、ハンデリの多数の部民を殺した。（PMO, т. 1, док. No. 77, л. 43）

同じ一六三〇年（八月二日以前）に、グシ汗から派遣されてウファー市に来た使者が、ツァーリの謁見を求めてモスクワへの通行許可を乞うたのも（PMO, т. 1, док. 81）、グシ汗がツァーリから支援をとりつけようとしたのかもしれない。

ところで、カラクムへ現れる以前ダライ、グシらがどこにいたのかを問題にしてみよう。先づダライはイルティシュ川上流域にいたものらしい。一六三〇年九月十日にウファーからダライらのもとへ派遣されたロシア使者に授けたウファー知事の訓令の内に、ダライらに申渡すべきことの一つとして、「タライ-タイシャ Талай-тайша とその子ダルゼイ-タイシャ Дарзей-тайша、及びこれらと共に遊牧するタイシャらは、以前の自已の牧地たるイルティシュ上流域に на старых своих кочевьях в-Иртышских вершинах 遊牧せよ。ヤイク下流域、エンバ流域、及びトボル Тобол 流域に遊牧する勿れ」(РМО, т. 1, док. No. 82, л. 77) とあることから、これが知られよう。因に、ダライは一六三七年に死亡し、その年彼の遺子たちがイルティシュ上流 вверх по Иртышу に遊牧していたという報告がある(РМО, т. 2, док. No. 27)。③

次にグシ汗についてであるが、残念ながら記録が見当らない。ただ後の例から判断すると、彼もイルティシュ上流域、就中タルバガタイ山脈方面にいたものではなかろうか。例えば、ターラ Tara 市に抑留されていたグシ汗の使者を送還するため、グシ汗のもとへ派遣されて、一六三六年七月一日にターラ市へ帰還したコサック隊長ステパン＝スクラートフ Степан Скуратов らの報告に、

彼ら(スクラートフら) はブハーラ人使者カーズィイ Казыйі (送還されたグシ汗の使者) と共に、タルバガタイ山脈のカラバザル川の地で на урочище на Тарабагате-каменн на реке на Карабазару クイシャ-タイシャに出合い、ブハーラ人使者を彼に引渡した。(РМО, т. 2. док. No. 5, л. 56)

とあり、この地方にグシ汗の本来の根拠地があったのではあるまいか。因にホショート出身の名僧ザヤ-パンディタが、チベットでの修業を終えて、一六三九年オイラトへ帰って来たとき、最初に身を寄せたのが、ホショートのバイバガスの長子オチルトゥ-タイジ(鄂斉爾図台吉)のもとであったが、

卯年(＝一六三九年) の秋帰着して、タルバガタイ Tarbayatai のハルバガ Xarbaya で、オチルトゥ-タイジ Očirtu tayiji の側で冬を過した。④

とあり、これもホショートの主力がタルバガタイ方面にあったことを教えるものであろう。そのハルバガとは、乾隆内府輿図（『清代一統地図』、国防研究院・中華大典編印会重印、台北、民国五五年）の科布多和屯・塔爾巴哈台和屯図（八九―九〇頁）に見える、塔爾巴哈台阿林の東北麓に当る哈爾巴哈喀倫（西三十三―西三十五。喀倫は哨探の義）方面ではなかろうか。

さて一六三〇年カラクムに現われたグシ汗のその後の消息を辿るとしよう。トルグート族長〔ホ＝〕ウルリュクのもとへ派遣されて一六三二年チュメニに帰還したチュメニの士族セミョン＝ポスコチン Семен Поскочин らの報告に、ウルリュクから聞いた情報として、

チュメニの近くトボル川沿いにタライ－タイシャの部民がいる。彼らは我が（＝ロシアの）貢納民を劫掠・殺害・拉致するかもしれない。トボリスク郡のコウルダク郷 Коурдацкая волость へ攻め入るため、イシム Ишим の子アブライ Аблай と共にタライ－タイシャは自己の部民を派遣したが、今またタライとクシェイ Кушей とタイグシュ Тайгуш －タイシャらは攻撃のため自己の部民を派遣しようと欲している。どの町を狙うか、それについてはセミョンらにウルリュク－タイシャは述べなかった。（РМО, т. 1, док. No. 94, л. 103-103 об）

とあり、これより見れば、ダライ・グシ汗(Кушей)らは当時イルティシュ川の支流トボル川流域に姿を見せたらしくおもわれる。彼らがその後果してどこかの町へ攻撃をかけたか否かは、記録を欠くようなので分らない。ダライと共に遊牧していたとみられるアブライなる者は、シビル汗国最後の汗クチュム Кучум（一五九八年頃没）の孫に当るが、シビル汗国滅亡後、クチュムの子アレイ Алей、アジム Азим、イシム Ишим らは往時の勢威を回復すべき実力を有せず、オイラト王侯に頼って、彼らと共に遊牧するようになったといわれ⑤、こうした事情の下にイシム⑥の子アブライがダライと共に遊牧していたものであろう。

次にグシ汗が現れるのは、一六三四年である。この年、イルティシュ上流右岸にある塩湖として名高いヤムィシュ湖⑦

Ямыш-озеро (Ямышевское) へ塩の採取のため派遣されたトボリスク土族ミハイル＝ウシャコフ Михайл Ушаков らの現地報告によれば、ウシャコフらは八月一日湖周辺に設営以来、十二日間も塩の積込みができなかったとし、その理由として、

なぜなら、塩湖の方へクイシャータイシャ Куйша-тайша が自らのウルスのカルマク人らと大勢のタイシャとを伴って、遊牧しつつ来て、（小略）ヤムィシュ塩湖にカルマク人の甲冑武者 кузнники 二千が宿営したからである。（PMO, т. 1, док. No. 107, л. 24）

といっている。このようにグシ汗が武装兵多数を具してヤムィシュ湖へ現れた理由は何であったろうか。かつて考察したように、この頃までジュンガル部のバートゥル－ホンタイジの本営はしばしばヤムィシュ湖近辺に置かれたが（拙稿「カラクラの生涯」、参照）、そのことを考慮すると、グシ汗はバートゥルと直接的に接触する必要上この方面へ移動して来たものではなかろうか。その接触とは、具体的にいえば、次に述べる一六三四年の冬、バートゥル、グシ汗、ダライ－タイシらによって敢行されたカザーフ遠征と関係するもので、つまり、これに合流するために上記のグシ汗の行動があったものと考えたいのである。

一六三五年七月十九日白カルマク Белые Калмаки[8] 族長アバク公 князь Абак より派遣されてトボリスクに到着したその使者の供述によれば、オイラトのカザーフ遠征について、左の如き情報が伝えられている。

彼ら（使者ら）が白カルマクにいたとき、アバク公のもとへヤサク（毛皮税）徴収のため、黒カルマク（＝オイラト）から三十人程が来た。[9] また同じ頃、黒カルマクの人四十人程がキルギズ Киргизы へヤサクのために赴いた。[10] アバク公のもとへ来た黒カルマクらが言うに、黒カルマクのタイシャら、即ちタライ－タイシャ Талай-тайша、コンタイシャ Контайша、クジ－タイシャ Кужи-тайша、及びトゥルゴチャ－タイシャ Тоургоча-тайша が総ての黒カルマクを伴って、今冬カザーフ－オルダ Казачья орда の方へ赴いた。カザーフ－オルダ人も黒カルマクに向かって来た。そして黒カルマクがカザーフ－オルダ人と遭遇したとき、大戦闘が起こっ

た。黒カルマクはカザーフ－オルダ人を撃破し、後者からイシム Ишим の子ヤンギル王子 царевич Янгыр を捕虜にした。イシムとはカザーフ－オルダで王 царь であった者だが、[11] その王子が黒カルマクに抑留中である。

また別の黒カルマクが、同じタイシャら、つまりタライ－タイシャらに率いられて、再びカザーフ－オルダに戦端を開いた。(PMO, т. 1, док. No. 123, л. 232 об)

これによれば、デルベートのダライ－タイシ、ジュンガルのバートゥル－ホンタイジ（＝コンタイシャ）、クジ－タイシャことグシ汗らが一六三四年冬以来、[12] カザーフ－オルダのヤンギル王子ことカザーフ大オルダの汗ジハーンギール Jihān-gir（在位一六二九―八〇年）に対し遠征し、これを撃破して、ジハーンギール自身を捕えた上、さらに多分一六三五年夏頃に、前記のタイシャらが陣容を整えて、再度カザーフに対し戦端を開いたものとおもう。[13]

以上が PMO, т. 1 から見たグシ汗のおおよその動静である。

① 山口、前掲論文、注(57)、参照。

② Biography of Caya Pandita in Oirat Characters (Corpus Scriptorum Mongolorum, Tomus V, Fasciculus 2-3, Ulanbator, 1967. 以下, BCP と略称), p. 76.

③ 『ザヤ－パンディタ伝』によると、ザヤ－パンディタがトルグートへ巡錫した折、

その申年（＝一六五六年）の冬、ドルベートのトイン Toyin のもとで、ハラフム Xara xum で冬を過した。(CBT, 18a)

とあり、トイン（托音）は、ダライ－タイシの第三子と考えられ（西域同文志巻九、都爾伯特衛拉特屬）、父の後を受けてデルベート族長になった人であるが、それが一六五六年にカラクムにいたのであるから、デルベートの主力は結局この方面に移牧したとみられる。

④ CBT, 3b. なお、ザヤ－パンディタの伝記については、拙稿「蒙古ラマ教史上の二人の弘法者―ネイチ－トインとザヤ－パンディタ―」（『史林』五六巻一号、一九七三年）、参照。

⑤ PMO, т. 1, Прим. 10 (стр. 307).

⑥ イシムとオイラト王侯との関係を一言すると、一六二〇年十月十六日付ウーファの通事ブャトゥンカ＝セミョーノフ Пятунка Семенов の供述書によれば、イシムは（トルグートの）ウルリュクの娘と離婚し、「今イシム王子 Ишим-царевич は結婚し、（ジュンガルの）バイバギシュ・チュクル－タイチの実妹（姉？）родная сестра を娶った」(PMO, т. 1, док. No. 50, л. 29) という記事がある。これよりすれば、イシムはジュンガルのバートゥル－ホンタイジ（バイバギシュ、チュクルの兄）と義兄弟の関係にあったことになる。

⑦ 『清代一統地図』六九―七〇頁、西三十一―西三十二に見える達布孫淖爾 (Dabusun nōr) である。ヤムィシュ湖は、塩の採取地としての他に、ロシア・モンゴル貿易の互市場としても有名であった。「一七世紀二〇年代から、塩を求めてこの湖へシベリアの勤務人が定期的

に来るようになった(年間八百人未満)。而してその塩は俸給支払いに用いられたものであった。勤務人と共に商人も赴き、この地でブハーラ人商人(東西トルキスタンのイスラム商人―筆者注)、オイラト人、モンゴル人と盛んにバーター貿易を行なった。ヤムィシュの定期市で支配的地位を占めたのが中国商品であった。しかし貿易は、《多くのカルマク人》の牧地と接近していたため、しばしば中断された」(РМО, т. 2, стр. 410. прим. 8, к док. No. 5)。

⑧ 一七世紀のロシア文書では、オイラトを黒カルマクと称したのに対して、オビ川西岸流域、アルタイ北麓地方のテレウト族 Телеуты (テレングト族 Теленгуты) を白カルマクと称した。

⑨ 白カルマクからヤサクを徴収する権利を握っていたのはジュンガル部であったらしい。これを裏づける当時の史料は見当らないが、やや後の一六四七年にトムスクに来たバートゥル―ホンタイジの使者の言によると、「コンタイシャは白カルマクへ、コカ公 князь Кока (=アバク公の子 Кока Абаков。父の死後を承けて白カルマク族長となっていた) とマチク Мачик〔公〕のもとへ、ヤサクを集めるため、自己の弟チョクルの妻なるシラ=ウルマ Шира-Урма と自己のウルスの民三百人を派遣した」(РМО, т. 2, док. No. 94, л. 189) という記事がある。

⑩ やはりジュンガル部がキルギズのヤサク徴収権を持っていたようである。キルギズは当時アバカン Абакан 川を中心に、イェニセイ川上流域に住牧したが、当地の有力なキルギズ公タブン Табун・イゼルチェイ Изерчей 兄弟はジュンガルのカラクラの(姉)妹を母とした。而してこのタブンらの母について、一六三八年九月二十二日にベールゥイ=ミュス Белый Мюс 川(チュルゥイム Чулым 川の上流)にいたタブン公とその母アバカイ公妃 Абакай-княгиня らのもとに立寄ったトムスクの使者(この使者は本来モンゴルのアルトゥン汗 Алтын-хан へ派遣されたものである)の報告に、

公妃アバカイ княгиня Абакай は、黒カルマク族で、カラクラの(姉)妹 Karaгулина сестра であるが、全キルギズを支配している、(РМО, т. 2, док. No. 28, л. 16)

とあり、また、

アバカイ公妃とその子タブンにキルギズは従っている слушают。(Там же, л. 17)

といわれている。こうしたカラクラとキルギズ公との姻戚関係等から考えると、キルギズのオイラトへの従属はカラクラの事業であったようにおもわれる。

⑪ この会戦以前にイシム汗 Ishim Khan は死没している。在位一五九八―一六二八年 (См. История Казахской ССР, т. 1, Алма-Ата, 1957, стр. 175)。

⑫ 当時のロシアの暦法では、年初を九月一日に置いたので、前掲文書に「今冬」とあっても、グレゴリー暦でいえば、前年(一六三四年)冬ということになる。

⑬ この戦いの結末についてはよく分らない。但しジハーンギール汗は後カザーフへ生還し、一六四三年に、バートゥル―ホンタイジとホショート勢のアブライ―タイジ・オチルトゥ―タイジらの連合軍と戦って、今度はこれに敗北を喫せしめた。オイラト軍の敗北の原因には、オイラト王侯間の不和が介在している。その間の事情については、拙稿「センゲ支配期のジュンガル汗国の内乱」(『遊牧社会史探究』第四二冊、一九七〇年。特に注一八)、参照。

二

ここで問題にしたいのは、グシ汗の兄バイバガスに関してのことである。かつて指摘したように、バイバガスは汗と号して、オイラトの最有力者であったとみなさるべきものであった（尤もジュンガルのカラクラの台頭の前にその地位は脅かされつつあったというべきである）[1]。そもそも汗の地位は、バイバガスの祖父ボバイ＝ミルザ Bobai mirza（博貝密爾咱）が初めてオイラト汗（衛拉特汗）と称して以来[2]のことで、それがバイバガスの父ハナイ＝ノヨン＝ホンゴルをへてバイバガスに伝わったものとおもわれる。こうしたバイバガスがロシア古文書ではどのように伝えられているであろうか。ズラートキン著『ジュンガル汗国史』によれば、一七世紀の二〇―三〇年代のロシア文書には、一つとてバイバガスの名に言及したものがないことは注目すべきである（ИЛДжХ, стр. 149）、と述べてあるが、筆者は以下に取り上げる文書はバイバガスに言及したものとおもう。

その第一は、ウーファ官衙の通事プャトゥニカ＝セミョーノフ Пятунька Семенов がカルムクのバイバギシュ＝タイシャのウルスから帰った直後、一六二〇年十月十六日にウーファで訊問に答えたその供述によれば、

訊問において通事プャトゥニカ＝セミョーノフは以下の如く述べた。彼がカルマク人らから聞いた所によれば、昨年、カルマク人の方へカザーフ＝オルダのイシム王 Ишим-царь が攻めて来たが、それは彼のもとへカルマクのタイチャ（シ）らが和平の使節を送ったためであった。そのカルマク使節がイシム王のもとにいたまさにその時分に、カルマク兵が到来して、イシム王のウルスの民を攻撃した。そこでイシム王はカルマク使節を殺すよう命じた。使節を殺し、自己の民を集めて、カルマクのタイチャ（シ）二人と多くの人を殺害した。

そして今年、カルマク人の帰還を前にして、カルマク人の方へアルトゥン王 Алтын-царь の兵が到来し、黒カルマク人とカルマク＝ウルスを攻めて、多くの人を殺害し、タイチャ（シ）二人を捕虜にした。三人めのタイチャ（シ）なるバイバギシュの弟テグルチェイ＝ウテ

クBайбагишев брат Тегурчей утек は、ブャトゥニカの滞在中、兄バイバギシュの方へその牧地へ逃れて来た。(PMO, т. 1, док. No. 50, л. 27)

とあり、ここに見えるバイバギシュがホショートのバイバガスに、その弟のテグルチェイ＝ウテクが Dörügeči ubaši の訛伝で、クンドロン＝ウバシその人とみなされるのである。実はズラートキン氏もこの文書を利用しているのであるが、但しバイバギシュをジュンガルのカラクラの子バイバギシュの方にとっている(ИДжХ, стр. 141)。筆者はその見解に与しないものである。③

要するに、上記の史料の意味する所は、一六二〇年八月末までに(暦法上、昨年とは、一六一九年九月一日―一六二〇年八月三十一日までとなる)、オイラト軍がカザーフ大オルダのイシム汗 Ishim khan(在位一五九八―一六二八年)を不意討したが、やがて後者から逆襲をうけ、ためにオイラト側はタイシャ二人の戦死を含め、大敗北を喫したらしい。そして今年、即ち一六二〇年九月一日以降、セミョーノフの供述のあった十月十六日までの間に、オイラト軍の帰還に先立って、外モンゴルのジャサクトゥ汗部の強酋で、オイラトの宿敵であったアルトゥン汗④の軍が、好機とばかりに、オイラトに攻め入り、オイラト側は二人のタイシャが捕虜になるなど、大損害を蒙った。このときクンドロン＝ウバシは兄バイバガスのもとへ敗走したと、このように考えられるのである。

第二に、一六二〇年十月二十三日―十一月二十八日の間に作成されたと推定されるウーファ知事の使節庁宛報告(PMO, т. 1, док. No. 52)を取り上げたい。本文書は、主として前記のセミョーノフの使節の始末をモスクワの使節庁へ報告したものである。以下これによれば、セミョーノフの本来の使命は、カルムク人の間に抑留されているバシュキール人捕虜の送還を交渉するにあった。まずセミョーノフ一行は、

イシム Ишим・イルティシュの上流でカルマクの牧地に到達した。そこにカルマクのタイチャー(ソ)バイバギシュが遊牧していた。(док. No. 52, л. 18-19)

という。イシム川は、イルティシュ川の左支流で、トボリスクとターラの中間辺りでこれに注ぐものである。この両川上流の間の地にバイバギシュは遊牧していたものであろう。なお別に、この年十月二十三日に、カルムクの虜囚からチュメニへ逃れて来たチュメニ勤務のタタール人らの供述によれば、「全カルマク人がカムィシュロフ Камышлов 沿岸に遊牧している。というのも、彼らをアルトゥン王 Алтын-царь の民が圧迫しているからだ」（РМО, т. 1, док. No. 51, л. 148 об）との情報がもたらされている。カムィシュロフ川は、やはりイルティシュ川の左支流で、その河口からイルティシュ川を溯上すること一日にしてオミ Омь 川の河口（一七一六年この河口にオムスク Омск 市建置）に到るという位置にある。[5] 要するに、オムスクに近く、カムィシュロフ川流域にバイバガスはじめ、オイラトの主力が遊牧していたと考えられ、かくもオイラトが北上したのも、主としてアルトゥン汗と、さらにはカザーフ大オルダとから、東西から圧迫を受けたがためであろうとみなされるのである。

さてセミョーノフは、バイバガスと会見し、カルムク人がウーファ管下のバシュキール郷へ侵入して、多数のバシュキール人を殺害し、その妻子を拉致したことを責め、拉致された者の送還と、今後こうした行為の再発防止の誓約を求めた（РМО, т. 1, док. No. 52, л. 19）。このような申入れを受けてからバイバガスは次のような行動を取った。

［バイバギシュは］以下のタイチャ（シ）ら、即ちタライ Толай とウルリュク Урлюк とチョクル Чокур の方へ通知を送った。次いでこれらの者の間で、チュクル－タイチャ（シ）のもとで集会 съезд が開かれ、以下の如く約定 договор が出来た。「バシュキール人捕虜を捜索して送還する。今後陛下（シャーリ）のバシュキール郷に侵攻しない。獣猟のさい、バシュキール人を殺害したり、掠奪したりしない。いかなる悪事も犯さない。陛下の高き御手の下に入る」（Там же, л. 19a）

ここにいうタライがデルベート部長ダライ－タイシに、ウルリュクがトルグート部長ホ＝ウルリュクに、チョクルがジュンガル部長カラクラの子チョクルに当ることは自明であろう。

この結果、「バイバギシュ－タイチャ（シ）は、全タイチャ（シ）の約定に従って陛下の方へ、嘆願するため、カルマク使者を派遣

した」(Там же, л. 22)のであった。而してこの使者一行は一六二〇年十月十九日ウーファに到着した。次いで使者らは十月二十三日ウーファ知事の面前に引き出され、その場で、上記の約定の遵守を、タイシャらの名において代理宣誓した。

〔使者らは〕自己のタイチャ[シ]、即ちバイバギシュとタライとチョクルとバイバギシュの弟テュグルチェイ Байбагишев брат Тюгурчей とバイバギシュの子アルケル Байбагишев сын Аркел と全タイチャ[シ]、並びにイシム王子 Ишим-царевич、及び全ウルスの兵士、に代って宣誓した。(Там же, л. 25)

ここに見えるバイバギシュの弟のテュグルチェイなる者は、Dörügeči の訛伝で、クンドロン＝ウバシの謂であろう。またその子のアルケルとは、バイバガスの次子アブライ[ス] Ablai (Abalai 阿巴賴) とみなされよう。(なおイシム王子については、本稿第一章の注⑥を参照されたい。)

以上の史料から、当時のバイバガスの動静の一端を、特にオイラト汗としての役割を具体的に一つ明らかにできたとおもう。

第三に、一六三二年一月十二日モスクワの使節庁でカルムク使者[⑥]に行なった訊問の調書である。その一節にいう。

使者らは以下の如く述べた。その捕虜を、偉大なるツァーリに献上するため、彼ら(使者ら)と共に遣わしたのはバイバギシュの子である。かの捕虜はカルマク族で、名をコヌハ Конуха の子ノトゥチュケイ Нотучкей という。彼の父コヌハは普通のタイシャ тайша обычной であったが、バイバギシュータイシャの祖父 дед――その名は挙げられていない――を殺害し、その後バイバギシュをも殺害した。そこでバイバギシュの子たちは、その親族と一緒に集まって、ノトゥチュケイの父を殺し、その妻子兄弟を諸国に売り飛ばした外、残された者も、将来彼らの方から危害を加えないように、方々へ追放した。そのコヌハの子ノトゥチュケイも、バイバギシュの子が陛下に奴隷として献上するために送って来たのである。(РМО, т. 1, No. 87, л. 21-22)

筆者はここにいうバイバギシュがホショートのバイバガスその人だとおもう。[⑦] 彼が何時殺害されたかについては、右のカルムク使者がウーファ経由でモスクワへ来ており、而して、そのウーファ出立が一六三一年十一月二十四日であるので

(PMO, т. 1, стр. 312, прим. 77 к док. No. 87)、これ以前ということになるが、それ以上に細かくは今分らない。いずれにせよ、バイバガスの卒年を一六四〇年とするズラートキン氏の説は却けられなければならない。[8] バイバガスに先立って殺害されたその祖父とは、一見ボバイ＝ミルザらしくみえるが、果してそのように決めてよいか判断に苦しむ。というのも、ボバイ＝ミルザのオイラト汗の地位は、その死後、その子ハナイ＝ノヨン＝ホンゴルに伝えられたはずで、而してハナイはハルハのアバダイ汗 Abadai qayan と戦って、一五九〇年前後に敗死し、アバダイ汗の子シュブーダイ Šubuγadai が一時オイラト汗に父から封ぜられたことが知られているからである（岡田英弘「ウバシ・ホンタイジ伝考釈」『遊牧社会史探究』第三二冊、東京、一九六八年）。つまり、ボバイとバイバガスが同一人の手に殺されたとするには、この間に余りに年代的隔差を生じすぎることである。この問題の解決は今後にゆだねなければならない。

バイバガスの横死後、オイラト汗の地位はグシ汗に受け継がれたものとおもう。既述の如く、グシ汗が初めてロシア古文書に姿を見せるのが一六三〇年五月作成の供述調書においてであったが、こうしたことも考えあわせると、そのオイラト汗に就任したのも、一六二〇年代の末頃のことであったのではあるまいか。

① 拙稿「カルムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」（『東洋史研究』二五巻一号、一九六六年）、同「オイラート族の発展」（『岩波講座世界歴史』一三、一九七一年）、参照。

② 欽定外藩蒙古回部王公表伝巻八一、青海厄魯特部総伝。

③ 本文書のバイバギシュを、PMO, т. 1 の人名索引はホショートのバイバガスと正しくとっている。

④ アルトゥン汗については、拙稿「カラクラの生涯」に詳しい。就きて参照されたい。

⑤ カムィシュロフ川の位置については、一六五四―五七年にイルティシュ路をとって中国へ往復したバイコフ Ф. И. Байков の旅行報告と編者の付注を見よ（Русско-китайские отношения в XVII в. Материалы и документы. т. 1 1608-1683. Сост. Н. Ф. Демидова, В. С. Мясников, Отв. ред. С. Л. Тихвинский. М., 1969, док. No. 74, прим., 11）。

⑥ このカルムク使者の一行は、以下のタイシャらの名代として派遣されたものである。ドゥルギチェイ＝タイシャ Дурличей-тайша、バイバギシュの子タイジ＝タイシャ Байбагишев сын Тайдзи-тайша。バイバギシュの子トルバイ＝タイシャ Байбагишев сын Толбай-тайша。ダイクシュ＝タイシャ Дайкуш-тайша。ウルリュクの子チュンベイ Урлюков сын Чюнбей (PMO, т. 1, стр. 312, прим. 77 к док. No. 87).

この内、ドゥルギチェイ＝タイシャがクンドロン＝ウバシに、タイ

ジータイシャがバイバガスに二子ある内の長子オチルトゥータイジに、トルバイータイシャが次子アブライータイジに相当するとみなされよう。

⑦ なお、同名で紛らわしいジュンガルのバイバギシュの方は、兄チョクルとの間の遺産争いから発展したオイラトの内乱の過程で、一六三〇年五月までに戦死していたことが確認される(PMO, т. 1, лок. No. 77, л. 42. 拙稿「カラクラの生涯」、参照)。従って前掲コヌハに殺されたバイバギシュを、ジュンガルの方のそれと混同する可能性は存しない(PMO, т. 1 人名索引もホショートのバイバガスと正しくとっている)。

⑧ ИДлХ, стр. 123. ズラートキン氏によれば、バイバガスが一六四〇年に高齢で卒した、との記事が『ザヤ-パンディタ伝』に見ゆというのであるが、氏はその該当頁をすら示していない。筆者はそのような記事を同伝に見出そうと努めたが、ついに発見することができなかった。否そのような記事は存在しないと断定するものである。憶測するに、ズラートキン氏の誤解は、一六四〇年制定の「モンゴル・オイラト法典」の前文に、その制定者として掲げられているモンゴル・オイラト王侯の人名リストに、バイバガスの名がすでに見えないという事実に影響されているのであろう。

三

次に、バイバガスの未亡人グンジ-ハトゥンに関する問題を取り上げたい。

一六五三年七月九日、勅命により、トボリスクからロシア使者グリゴリー=ウシャコフ Григорий Ушаков 一行がカルムクのアブライータイジ(バイバガスの子)のもとへ派遣された(そのトボリスク帰着は同年十二月三日)。当時ロシアは中国へ外交使節を派遣しようとしていたが、それにはイルティシュの水路を利用せねばならぬ必要上、その方面の有力なカルムク王侯と予め接触をとり、中国への往復に際し、その旅途の安全と便宜供与の保証がとりつけられねばならなかった。そうした使命をウシャコフは帯びていたのである。かくして後有名なバイコフ Ф. И. Байков が中国へ派遣され、清朝の首都を訪れた最初のロシア使節となったのである。

さて、ウシャコフの出立に先立って、これに授けられた訓令に、左の如き一項があった。

もしグンジャ Гунжа が死んでいたら、その場合には、陛下の下僕なる我々(トボリスク知事ら)はグリゴリーに対し、グンジャ宛に送られた陛下の下賜——サーベル、羅紗、ガラス玉——を、彼女の子ウチュルトゥータイシャ сын ее Учюртy-Тайша もしくは、

グンジャのウルスを治める者に渡し、かつその際、その陛下の下賜は、グンジャの陛下に対する奉仕のために、彼女に送られたものである、と告げるよう命じた。(PMO, т. 2, док. No. 134, л. 574-575)

ここに見えるウチュルトゥ－タイシャがバイバガスの長子オチルトゥ－タイジである以上、その母グンジャは故バイバガスの未亡人でなければならない。

グンジャの安否については、ウシャコフ一行がカルムクの地に入り、アブライ(バイバガスの次子)のウルス①の附近に到ったとき、カルムク人らから、グンジャが既に没し、その遺衆をアブライが治めている、と聞かされたのであった。

グリゴリーらとグンジャの使者コシュチ＝エネイ Kouyun Eneĭ②がカルムクへ、アブライのウルス附近に到ったとき、カルムク人らが彼らに言うに、グンジャは死んだ、彼女のウルスを治めているのは、彼女の継子アブライ－タイシャ пасынок ее Аблай-тайша である、と。(Там же, л. 577)

ここからも分かるように、オチルトゥ、アブライが異母兄弟③であったことは、既に知られた事実であるが、それよりもグンジャがいつ亡くなったのかというと、それについては、『ザヤ－パンディタ伝』に関係記事がある。

辰年(一六五二年)の冬、〔ザヤ－パンディタは〕ハラタル Xaratal へ、ツェツェン－ハーン Ceceн xān のもとに到り、冬を過した。その冬、ツェツェン－ハーンの母グンジ－ハトゥン Günji xatun が亡くなられたので、霊を弔い、読経を盛大に行なった。(CBT, 15a)

このように、ツェツェン－ハーンことオチルトゥ＝ツェツェン－タイジ④の母グンジ－ハトゥンは、一六五二年冬に没したのであった。なお、このとき、ツェツェン－ハーンの遊牧していたハラタルとは、バルハシ湖に注ぐ哈拉塔爾必拉(川)(『清代一統地図』八九―九〇頁)の謂であろう。

グンジ(グンジャ)－ハトゥンの死亡の時期については、実はロシア古文書にも記録があるのである。一六五三年八月二十日付のトボリスク知事によるシベリア庁宛報告の一節に、この年六月六日ターラ知事からの通報として、

クイシャの妻グンジャ Куйшина жена Гунжа は今冬死亡した。(PMO, т. 2, док. No. 133, л. 565)

とあり、まさしくその死亡は一六五二年冬のこととなり、オイラト史料と完全に合致する。ただここで新たに問題となるのが、グンジャをクイシャ即ちグシ汗の妻としていることである。この点に関しては、情報の誤りなどではなく、まぎれもない事実なのである。これを示す他の例をもう一つ挙げよう。

一六五二年八月三十日モスクワの使節庁で訊問を受けたグンジャの使者コシュチ＝エネイの供述に、トルグートのダイチン Дайчин (Sükür dayiçing 書庫爾代青)、ラウザン Лаузан (Blobzang 羅蔵)らとグンジャとの間に往来があるのかと問われて、使者コシュチ＝エネイは次の如く答えている。

また使者は以下の如く述べた。彼ら(ダイチンとラウザン)の父ウルリュクータイシャ[5] Урлюк-Тайша はグンジャの兄(弟)であった。彼らダイチン－タイシャとラウザン－タイシャは彼女の甥であるが、彼女から遠く四箇月余りの行程の地に遊牧している。しかし互に親愛の意を伝える使者を往来させている。

彼女の夫クイシ－タイシャ муж ее Куйши-Тайша は今ムガール(ヤンガル)地方 Мугальская земля を支配している。そのため、彼はムガール地方に住んでいる。(PMO, т. 2, док. No. 126, л. 306-307)

ここに見えるグンジャの夫クイシ－タイシャが、青海地方へ進出して、一六四二年チベット王の座についたグシ汗であることに毫も疑いがない。また右の記事から、グンジャがトルグート王家の出身であったことも知られるのである。

さてバイバガスの未亡人であったグンジ－ハトゥンがグシ汗の妃と化していたことが明らかとなった以上、この間の事情を、筆者としては、バイバガスの死後、その未亡人をグシ汗が娶ったものとして考えざるをえない。要するにレヴィレート婚が行なわれたのである。その再婚の時期については、グシ汗の妃としてのグンジ－ハトゥンがロシア古文書に一六三六年を以て初出とされるので (PMO, т. 2, док. 38, л. 742)、従ってバイバガスの没したと推定される一六二〇年代末頃以降、一六三六年までの間ということになる。その際、オイラト汗の称号も当然グシ汗の継承する所となったのであろう

と考えられる。ただ故バイバガスの遺したウルス自体に関しては、それは依然グンジ－ハトゥンの手に掌握されたとおもわれる。グシ汗の青海進出に際しても、グンジ－ハトゥンがこれに同行した形跡がなく、むしろ明瞭に彼女はタルバガタイ方面に残留したといってよい。そのようにして一方ではグシ汗の留守を預るとともに、他方では前夫の遺衆を守り続けて、オイラト汗二代の夫人としての声望を全オイラトに維持しつつ、[6] 一六五二年冬生涯を終ったものとみられるのである。

① アブライのウルスは、バイコフの旅行記によれば、イルティシュの左支流ベシュカ Бешка 川流域にあった（См. PMO, т. 2, док. No. 136, л. 74-76）。

② このグンジャの使者は、一六五一年十月十七日トボリスクに到着し、翌年五月モスクワへの通行を許され、かくしてツァーリから謁見を賜った後、ようやく今帰途についたものである。

③ アブライの生母はタイスン－ハトゥン Tayisung xatun といい、一六三九年冬に逝去したが（CBT, 3b）、オチルトゥのそれは、グンジ（グンジャ）－ハトゥンである。

④ オチルトゥがダライラマからハーン号を授けられたのは、そのラサ滞在中の一六六六年のことである。

午年（一六六六年）、〔ダライラマは〕オチルトゥ－タイジに対し、ハーンの礼服一揃を賜い、オチルトゥ＝ツェツェン－ハーンと称号を授けた。（CBT, 31b）

⑤ トルグート部長ホ＝ウルリュク（和鄂爾勒克）。一六四四年没。その跡を継いでトルグート部長となったのがダイチンである。

⑥ 一六五一年十月十七日トボリスクに到着したグンジャの使者コシュチ＝エネイが、モスクワへの通行許可を求めて、トボリスク知事の訊問を受けた際、その供述の一節に、次の如き発言がある。

カルムク人は皆彼女（グンジャ）を敬い почитают、これに聴従し слушают、そして彼女を母と呼んでいる называют ее матерью。（PMO, т. 2, док. No. 125, л. 448）

これはグンジャ派遣の使者の言であるだけに、ある程度の誇張は免れ難かろうが、グンジャが実際にそれに類する声望を有していたとみても不都合はないとおもう。

四

話題を再びグシ汗に戻して、以下 PMO, т. 2 所収のロシア古文書に主として依拠し、その残された事績を明らかにしていくとしよう。

一六三五年九月一日黒カルマクのオルチャク族 Орчакн[1] のコフトベイ公 князь Кохтобей のもとから帰ったトムスク使者の報告によれば、コフトベイが自らトムスクへ赴いて、ツァーリに対し臣従の宣誓をする約束があったのに、使者の帰還に当ってコフトベイから同行を拒絶された。その言う所の理由は次の如きものであった。

コフトベイ公がトムスクへ自ら赴かなかったのは、当時彼のもとへそのウルスへ、バイバガチェ Байбагач のウルスから、コンジータイシャ Конжи-Тайша の使者が派遣されて来たためであった。(РМО, т. 2, док. No. 4, л. 401)

ここから、コンジータイシャことグシ汗が、当時故バイバガスのウルスに居たらしいことが分かる。これまでに明らかになった所からすれば、グシ汗がグンジーハトゥンの夫として、彼女のウルスに居たということになろう。

次に、第一章で言及した、グシ汗をタルバガタイ山のカラバザル川の地に訪れて一六三六年七月一日ターラ市へ帰還したステパン＝スクラートフの使節行に関する記録である。その記録によれば(РМО, т. 2, док. No. 5)、スクラートフの使命は、一六三四年にターラ市並びにチュメニ市管下の諸郷からグシ汗らに拉致されたロシアの貢納民の返還を交渉することであった。このためには、グシ汗がその送還を執拗に要求していたターラ市拘留のグシ汗の使者を釈放することとし、これを護送する任務も帯びていたのであった。そのグシ汗の使者は、名をカーズィイ Казый といい、本来ブハーラ汗イマムクリ Имамкулы(在位一六一一―一六四二年)からグシ汗に派遣された隊商を率いて来た者であったが、この者を利用してグシ汗が自己の商品を販売させるため、通商使節としてターラ市へ派遣したところ、グシ汗の不法行為を怒っていたターラ市当局により拘留されたままになった。[2] これが因で、カルムクとブハーラ汗との間に戦争が始まったといわれる。グシ汗の執拗な要求もそのためで、結局ターラ市当局側が折れて、捕虜送還交渉のために、使者の釈放に踏みきったのである。

カーズィイの送還が実現したにもかかわらず、グシ汗の態度は意外にも依然かたくなで、僅にターラ管下の捕虜一人の送還に応じたのみであった。残り総ての捕虜については、一六三五年ウーファ市を攻撃して捕えられたクチュム汗(シビ

ル汗国最後の汗）の孫アブライ Аблай 及びティアヴカ Тяпка と交換でなければ、釈放できないと反駁した。むしろこれの送還なき限り、ロシアとの恒久の平和はあり得ないとすら言っている。このクチュムの孫たちは、既述の如く、汗国復興の空しい期待を抱いて、オイラト王侯の軍事的支援の下にロシアに抵抗していたものである。

さて一六三六年八月二十六日ジュンガルのバートゥル－ホンタイジを訪問して、トボリスクに帰ったトミロ＝ペトロフ Томило Петров の報告によると、バートゥルはペトロフに対し、ロシアがヤムィシュ湖から塩を搬出する場合、従来通りこれに協力することは承知するが、現下の情勢ではそれは困難であるとして、その理由を次の如く挙げたという。

当時ヤムィシュ湖の方へ、彼（バートゥル）が自ら赴いたり、部下を派遣したりすることはできない。なぜなら、彼らに対しムガール人が戦端を開いたからである。そのため彼ら全カルマクタイシャがムガール人に向かって進発しつつあるのである。（PMO, т. 2, док. No. 9, л. 41）

これは、PMO, т. 2 の編者の指摘する如く（стр. 412, коммент. 5 к док No. 9）、バートゥル－ホンタイジによる青海のツォクトゥータイジ Čoγtu tayiji に対する遠征を言ったものに相違ない。グシ汗の生涯の内で最も劇的な青海進出は、このように一六三六年夏より開始されたのである。以下、ロシア古文書から見たグシ汗の青海進出の経緯を述べるが、その前に、チベット史料から見たその経緯を、山口瑞鳳氏の研究（「顧実汗のチベット支配に至る経緯」）から要約して述べておこう。

一六二八年来、ハルハに内乱があり、熱心な紅教信者であったツォクトゥータイジは内乱を助長したとして諸酋に嫌われ、ついにハルハから逐われて青海地方に到り、ここでアルタン汗以来のゲルクパ信者であった内モンゴル族を征服した。時に一六三四年のことである。ツォクトゥータイジはさらに東チベットのゲルクパ勢力をも脅かしたので、ダライラマ五世はこのゲルクパの危機を救うため、オイラトに救援の使者を送った。この要請を受けてグシ汗が実情調査のため、一六三五年十一月巡礼者を装ってチベットへ赴き、翌三六年初頭ラサに着いて、ダライラマと会見した。次いで一旦帰国したグシ汗は、バートゥル－ホンタイジの軍と共に、一六

三六年の秋冬の結氷期を利用して、イリ川、タリム川を渡り、ツァイダム湿地を横切って、翌三七年蒙古暦一月に青海の西側ウランホショの地に到り、一万足らずの兵を以てツォクトゥの三万(四万との説もある)の兵を一日にして殲滅した。グシ汗の一子ダヤン－タイジらは、ツォクトゥの残兵を追ってこれを全滅させ、このときツォクトゥ自身も捕殺されたといわれる。かくしてアムド方面を平定したグシ汗は、中央チベットに進んで、ダライラマに謁し、持法者法王 Bstan ḥdsin chos kyi rgyal po の称号を受けた。グシ汗は一六三七年冬青海に戻り、一六三八年と三九年の両年にわたってオイラトに残留していた配下をことごとく青海に呼寄せて、国造りに専念した。他方グシ汗は、この戦に同行したバートゥル－ホンタイジに、バートゥル－ホンタイジの称号と莫大な進物を贈り、加えて汗自身の一女をその妻として与えた上で、故地に帰らせた。その後もゲルクパの護教者を以て自任したグシ汗はさらに征服を進め、チベット全土を平定して、これをダライラマに献じ、一六四二年ダライラマを推戴して、自らはチベット王の座に登り、一六五四年に没した。

右の如き次第であるが、チベット史料の場合には、グシ汗擁護の性格が強いので、その点注意すべきであろう。

さて、「全カルマクタイシャ」によるモンゴル遠征は一六三六年夏に開始されたが、ロシア古文書によれば、その直前の同年五月十九日にトムスクにグシ汗 Кужа-тайша とオチルトゥ－タイジ Очера-тайша、及びボガティリ－コンタイシャ Богатырь-контайша ことバートゥル－ホンタイジの使者の到着があり、使者らは、彼らの主人を「ツァーリの高き御手の下に受容されるよう嘆願した。そのためには、クジャ－タイシャとオチェタ－タイシャとボガティリ－コンタイシャは、その各自の配下(使者)に対し、自己に代って〔臣従の〕宣誓をするよう命じてあった」(РМО, т. 2, док. No. 12, л. 410)という。こうしたグシ汗らの態度は、来るべきモンゴル遠征に備えて、ロシアとの関係改善をはかろうとしたものであったとみられよう。

一六三七年八月二十七日カルムクからターラ市に帰還したナザル＝ジャドフスキー Назар Жадовский らの報告によれば(РМО, т. 2, док. No. 22)、彼らはグシ汗下に抑留中のターラとチュメニ管下の捕虜の送還を求めるため派遣されたも

のであったが、ターラ市から六週間行程のヤムィン川 Ямын-река の地で、グシ汗のウルスを発見した。しかしグシ汗にも、グシ汗の子オンボ Кутайши тайшин сын Анбо③ にも会見することができなかった。

彼ら(グシ汗ら)は戦争に行ったとの噂であった。ロシア人捕虜から聞くと、昨〔七〕一四四年(一六三六年)秋、ムンガール人の方へ行ったとのことであった。そこでジャドフスキーは、ターラで彼に与えられた訓令書に従い、クイシャの妻コンジャ Конжка に対し、彼女がクイシャ及びその他のウルスから陛下のターラとチュメニの捕虜を探し出して、ターラ市へ送還せよ、と告げたのであった。(Там же, л. 21)

これによれば、グシ汗らが一六三六年秋に青海遠征に向かったこと、及びグシ汗の妃グンジ－ハトゥンがこれに同行せず、留守を守ったことが知られるのである。

青海方面での戦闘については、ロシア古文書に以下のような記録がある。その一は、一六三六年九月二十六日トボリスクからバートゥル－ホンタイジのウルスへ派遣されたトボリスク士族フィリップ＝オボリニャニノフ Филипп Обольянинов らの報告④である。

彼ら(フィリップら)はトボリスクから十週間を経て、コンタイシャ一党のウルスに遭遇した。コンタイシャ一党のウルスでは、コンタイシャの母及び妻の所へ立寄った。コンタイシャとその他のタイシャらはムガールへ戦争に出ていた。彼らがムガールのチョクトゥイ－コンタイシャ Чоктуй-контайша のウルス民四万を粉砕し、ムガールのチョクトゥイ－タイシャ自身を殺したというニュースが広がっている。戦闘から離脱したムガール人が、妻子を伴なって、夥しくコンタイシャの方へ走っているという。事実フィリップらもコンタイシャ一党のウルスで、コンタイシャが諸ウルスへ多くのムガール人捕虜を絶え間なく送って来ている他、ムガール人が妻子を伴なって、自発的に到来するのを目撃した。

また彼らがカルマクで聞いた所では、コンタイシャは中国 Китайское государство 辺境へと赴き、中国領で五人の石工を捕えたが、ムガールの国境に石造りの町を建設しようと欲しているがためとのことである。中国へ攻め行ったのかについては、彼ら（フ

イリップら)は知っていない。彼らの滞在中、コンタイシャとその他のタイシャらはムガールから自己のウルスへ戻って来なかった。(PMO, т. 2, док. No. 38, л. 737-738)

右にいう石造りの町とは、バートゥル-ホンタイジが当時ホボクサリ Хобоқ sari に建設中であった町のことであろう。こうした町はこの地に少なくとも四つが建設され、主としてブハーラ人(東トルキスタンの回教徒)捕虜を収容して農耕に駆使するための設備とされた。[5]

その二は、一六三八年六月二十八日付ターラ知事よりトボリスク知事宛通牒の中に見えるもので、ターラからバートゥル-ホンタイジのもとへ派遣されたコサック騎兵アレクセイ=クナーヴィン Алексей Кунавин がもたらした情報である。[6]

去る(七)一四四年(一六三六年)春(秋の誤りであろう)、カルマクのタイシャら-コンタイシャとその一党、並びにクイシャ-タイシャとその諸子、及び小タイシャら——が、黄ムガール жолтые мугалы とタングート тангуты[7] を攻撃に行った。コンタイシャに率いられた民は二万といわれ、その二万の内、七百が火器を備えた兵であった。クイシャ-タイシャに率いられたのはいか程あったかについては、アリョーシュカ(アレクセイ——筆者注)は実際に聞き知ることができなかった。

最初、黄ムガールのタイシャらを虐殺した上、多数のウルス民を殺害し、生き残った者も尽く捕虜にした。その後、タングートを攻めて、多数の人を殺し、夥しい捕虜を奪って、中国とブハーラの(東トルキスタンの——筆者注)諸都市との間の道路の梗塞を取り除いた。

コンタイシャは中国辺境へも行ったが、但し戦争のためではない。中国人はコンタイシャに、町の建設のため、工匠八人を与えた。上記のタイシャらはムガール地方に二年いて、莫大な戦利品を携えて去った。即ち、一人当り、九人の捕虜と九〔四?〕の緞子の他、多数の家畜を得た。賄方 кашевары も、各人三人の捕虜を手に入れた。カルマクのコンタイシャが遠征から自己のウルスへ帰着したとき、多数のムガール人捕虜を駱駝に載せて運んで来た他、妻子と一切の家畜を伴なったムガール人らや、二人のムガール人タイシャとその妻子が拉致されて来たのを、アリョーシュカ自身が目撃した。(PMO, т. 2, док. No. 38, л. 747)

これによれば、バートゥル－ホンタイジとグシ汗に率いられたオイラト軍が、ツォクトゥの勢力を壊滅した上、チベットでも大戦果をあげたことが分かる。かくして後グシ汗は青海地方に残留することになったが、バートゥル－ホンタイジは故郷への帰途につき、そのホボクサリへの帰着は、一六三八年春のことであったとおもわれる。

以上述べたバートゥル－ホンタイジらの青海遠征を境に、ロシア古文書には、グシ汗のその後の動静に関して記す所がない。[8] これから以後は清朝史料並びに蒙蔵史料に譲らなければならない。

① テレングト(白カルマク)族の一派とみる説もあるが、実体はよく分らない(См. РМО, т. 2, стр. 409, коммент. 2 к док. No. 4)。

② Очерки истории калмыцкой АССР, дооктябрьский период, М., 1967, стр. 101 によれば、カーズィイがターラ市に来たのは一六三三年とされるが、このときのカーズィイの供述に、オイラトのタイシャ達が防守協定を結んでおり、それによれば、各大タイシャは外敵からカルムクーウルスを防衛するための責任分担があった。即ち、西方からはウルリュク（トルグート）がノガイ人に対して、南方に控えたダライ(デルベート)がブハーラ汗に対して、クイシャ(ホショート)がカザーフーオルダに対して、バートゥル（ジュンガル）がアルトゥン汗に対して、各々防衛を負担せねばならなかったという。この供述の原文(Сибирский приказ, стлб. 656, ч. 1, лл. 149–150)を見ることができないのは残念であるが、果してそうした協定が実在したか疑わしいとおもう。事実、同書によれば(стр. 101–102)、協定の存在とは矛盾する形で、一六三五年以来、デルベートとトルグートの間で武力衝突が繰返されたことが述べられている（この衝突は少なくとも六〇年代まで続けられた）。ともあれ、カーズィイの供述が、当時各大タイシャが当面せねばならなかった外敵を示したものとすれば興味ある情報である。

③ Омбо, Омбо と見ゆ (См. РМО, т. 2, именной указатель)。グシ汗の子鄂木布 Ombu であろう。

④ この報告は、一六三九年八月十七日付トボリスク知事のシベリア庁宛報告(РМО, т. 2, док. No. 38) の内に収められている。使節のフィリップらは、一六三六年十二月上旬以来バートゥル－ホンタイジのウルスに滞在したが、いつトボリスクに帰還したかははっきりしない。

⑤ ホボクサリの町については、РМО, т. 2, док. No. 30, 37, 44, 50, 64 等に詳しい記述がある。就きて参照されたい。

⑥ この通牒も、一六三九年八月十七日付トボリスク知事のシベリア庁宛報告(РМО, т. 2, док. No. 38) の内に収められている。使者のクナーヴィンの使節行は一六三八年前半にあったとおもわれるが、詳細は分らない。

⑦ 黄ムガールは、本来、オルドス・青海方面の内モンゴル族をいうが、この場合、ツォクトゥの勢力を指すと考えられる。タングートはチベット人をいう。

⑧ 但し例外的に、次の如き記録がある。一六四二年十月八日トルグートのシュクル＝ダイチンのウルスから帰還したチュメニ勤務のタール人ヤングルコ＝ババショフ Янгулко Бабашов の報告 (РМО, т. 2, док. No. 59)に、ヤングルコがシュクル＝ダイチンのウルスで聞いた

情報として、ホショートのクンドロン＝ウバシに対し、その弟グシ汗Kyuuii から使者の派遣があり、このためクンドロンとしては、グシ汗が秋までに兵を伴なってムガール（青海地方）から実際に彼の方へ現われたら、これと共にシベリアの町を攻めに行くべく、その準備を整えている旨、シュクル＝ダイチンに対し、クンドロンから使者を介して通報があったという。

この情報は、当時グシ汗にシベリアの町を攻めるような余裕はなかったと考えられる上、ロシア古文書に後にも先にも関係記録が見当らない所を見ると、虚報であったらしい。

おわりに

以上、ロシア古文書に拠ってグシ汗の動静を、年代的に一六三〇年から一六三七年の間まで、跡づけると共に、これに付随してバイバガス汗とその妃グンジ－ハトゥンに関する記録も検討した。ただこれらを以てしても、グシ汗のオイラトにおける地位がなお明瞭を欠くことを自覚する。これを今後一層明らかにするには、ジュンガルのバートゥル－ホンタイジの存在が解明されねばならないであろう。本稿が取扱ったグシ汗の活動期においても、オイラトの最大実力者はこのバートゥルであったと考えるからである。その見地からすれば、グシ汗のオイラト汗としての地位も、ジュンガル部長の下風に立たされたものであったのである（バートゥルが実際に父カラクラの死後ジュンガル部長位を襲ったのは一六三五年であるが、カラクラの晩年にはバートゥルが実質的に部長であったといってよい）。ジュンガル部によるオイラトの覇権樹立の一つの大きな契機となったのが、バイバガス汗の横死を以て象徴されるホシュート部の内紛であったのではあるまいか。グシ汗の青海進出についても、その契機となったオイラトの青海遠征をバートゥルが主宰したのであって、グシ汗としては、その意を受けて戦勝後も青海に留まったと考えるべきであろう。その立場からすれば、この遠征をあたかもグシ汗が主宰したかのようにいうチベット史料には、グシ汗擁護の立場からの潤色が濃厚にみられる。例えば、グシ汗が戦勝後、帰国するバートゥルにホンタイジの称号を贈ったというが、この称号は、ロシア古文書によれば、これより先一六三五年三月三十日にトムスクに来た外モンゴルのアルトゥン汗側近のラマ僧ダイン＝メルゲン－ランズの使者の携帯した

ランズ書簡中に、すでにバートゥルによって用いられているのである（拙稿「カラクラの生涯」、参照）。この例の如く、ホンタイジの称号がグシ汗から授けられたとする訳にはいかない。

要するに、グシ汗の実像を今後さらに究明するためには、その生涯の空白がさらに埋められなければならないが、それとともに、バートゥル－ホンタイジの事績を具体的に明らかにすることも必要とされるであろう。バートゥルとの関係においてグシ汗の問題を改めて考えてみなければならない。バートゥル－ホンタイジをめぐる問題については、稿を改めて述べることにし、ひとまず本稿の筆を擱くことにしたい。

（追記）

去る八月三十日より五日間にわたってウランバートルで開催された第三回国際モンゴル学者会議の席上、PMOの編者スレサルチニク氏による「グシ汗に関するロシア古文書史料」と題する口頭発表があった。その内容はグシ汗に関するロシア古文書の記事をかいつまんで紹介したものであったが、いずれ詳細な論文として発表されるものと期待される。

（京都府立大学助教授　　）

Achievements of *Gūši xān* 顧実汗 through the Russian Archives

by

Hiroshi Wakamatsu

It was in 1637 that *Gūši xān* 顧実汗 of Oyirad, after the military expedition to *Köke nōr* 青海湖 in 1636, annihilated the troops of *Čortu qongtayiji*. Starting with this victory he pacified the whole of Tibet and at last became the king of Tibet in 1642, which process has been relatively well known to us. But hitherto few studies have been made on the early part of his life in his homeland Jungaria. In this article, using the Russian Archives, we try to throw light upon the obscure part of his life.

In that Archives we can find some of his figures. For example, in 1630, he pursued an enemy from the foot of the *Tarbaratai*, where his headquarter was situated, to Xara xum on the upper stream of the Enba, and in 1634, participated in the military expedition to Kazax. The battle against *Čortu qontayiji* is also recorded in the Archives. Moreover we have found in the same records on his elder brother *Bayibaras*, who seems to have been killed towards the end of 1620s. According to these records, *Günji xatun*, *Bayibaras*' widow, was remarried with *Gūši xān*. After *Gūši xān* succeeded his late brother *Bayibaras* as *Oyirad xān* and moved to Tibet, she remained in their home country and, enjoying the confidence of all *Oyirad*, kept it well during her husband's absence.

Paris Peace Conference, Japan and China

——"the racial equality problem" and the Japanese Minister's threat——

by

Hiro'o Fujimoto

Just before Paris Peace Conference, the progressive intelligentsia both in Japan and China praised Wilsonianism overlapping it with their